

1 4	岡崎	甲山中学校	ヤマモト マサシ 氏名 山本 将司
分科会番号	12b	分科会名	自治的諸活動と 生活指導（中学校）

1 研究テーマ

自分たちで考え、創り上げる学校行事を通した実践

2 研究概要

(1) 主題設定の理由

資料1は、4月に撮影した学級写真である。3年5組40名が、天気の良い桜咲く校庭で、素敵な笑顔を見せている。一見すると、落ち着いた雰囲気の中で順調な学級開きが進んでいるように見える。しかし、この写真撮影の場面では、学級としての課題が表れていた。このとき、学級写真は3枚撮影した。1枚目はポーズなし、2枚目はピースサイン、3枚目は学級オリジナルのポーズである。どのようなポーズにするかを学級に問いかけたところ、生徒は互いの顔を見合うばかりで、なかなか意見が出なかった。最終的には、副担任が「3年5組だから、指で3と5を作ろう」と提案し、そのポーズで撮影することになった。また、本学級では朝の会に「おしゃべりタイム」を設けている。



【資料1】 始業式の学級写真

学級代表、副学級代表が司会としてお題を決め、2分程度のフリートークを行っているが、そのお題決めにおいても、生徒は互いの様子をうかがい、自分から意見を出すことが難しい状況が見られた。このことから、自分たちで何かを決め、実行するという点に課題があることが分かる。

学習指導要領解説においても、中学校における特別活動、とりわけ学級会は、生徒が集団の一員として主体的に課題解決に関わる力を育成する重要な教育活動である。本校では、5月末に「地域の方々を招いて学級模擬店を披露する「そうだ 甲山、行こう」、9月下旬の「合唱コンクール」、11月上旬の「体育祭」という3つの行事を一体的に捉え、「甲山祭」という総合的な行事として位置付けている。行事に向けた学級会は、目的の共有や役割分担、意見の調整など、学級としての意思決定が求められる場面であり、自治的能力を育成する上で大きな意義をもつ。また、学級会を充実させるためには、「生徒指導上の実践上の4つの視点」を踏まえた指導が効果的だと考える。話し合いの中で一人一人の意見や思いが受け止められる経験は、自己存在感の感受につながる。また、互いの立場や考えを理解し合いながら合意形成を図る過程は、共感的な人間関係の育成を促す。さらに、生徒自身が行事の内容や進め方、役割分担を話し合い、決定していくことは、自己決定の場の提供として重要であり、主体的に集団に関わろうとする態度を育てる。その際、安心して意見を述べ合い、失敗を恐れず挑戦できる学級の雰囲気を整えることは、安全・安心な風土の醸成という点からも欠かせない。

本学級の生徒は、素直で優しく、互いを思いやる姿が多く見られる。一方で前述したように、集団の中で意見を表明し、意思決定に関わる場面では、消極的になる傾向がある。そこで、生徒が「自分たちで考え、協力し、甲山祭を創り上げていく」経験を積むことを通して、自己有用感を高め、充実した学校生活を送ってほしいと願い、本研究の主題を設定し、研究を進めていくこととした。

(2) 目指す生徒像

他者との関わりの中で自他のよさに気づき、次の一步を踏み出そうとする生徒

※「次の一步を踏み出そうとする」…自分の考えを更新し、更新した考えのもと行動に移す

(3) 研究の仮説

仲間への貢献活動の実施における教師支援を工夫したり、適切な場面での学級会を設定した上で生徒指導の実践上の4つの視点を取り入れた指導を行ったりすることで、自己有用感を高め、次の一歩を踏み出そうとする生徒が育つだろう。

【自己有用感】

人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他ともに肯定的に受け入れたことで生まれる、自己に対する肯定的な評価。

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた等、相手の存在なしには生まれてこない。
(国立教育政策研究所「自尊感情」？それとも「自己有用感」？より)

(4) 研究の手だて

⑦仲間への貢献活動（全員リーダー活動）の実施における教師支援の工夫

【全員リーダー活動】

一人一人で自分の得意なこと、自分でもできることを考え、仲間へ貢献する活動のこと

【リーダー】

よりよい自分を目指して、自ら考えたことを実践し、仲間への貢献行動をしようとする人

【資料2】全員リーダー活動についての説明

資料2のように、全員リーダー活動は自分でできる範囲の中で、仲間へ貢献する活動である。これは、本校のある生徒から生徒会へ「自分が楽しむとともに、人のために働きたい」という思いが届けられ、生徒会によって考案された活動である。この活動の実施において、教師が生徒の頑張りを価値付ける言葉かけを行ったり、振り返りの場面で、級友の頑張りを確認し称賛し合ったりする支援を行う。すると生徒は、自分のやれることを全力で行う中で、仲間から認められたり、仲間の素敵さに気付いたりする。そして、自己有用感を高めていく。

④適切な場面での学級を設定した上での、生徒指導の実践上の4つの視点を取り入れた指導

【適切な場面】

学級の問題を共有する場面	生徒自身から今の学級の問題を生み出し、解決するための具体性と必要性を実感させる。
目標（スローガン）の決定の場面	ただ目標を決めるだけでなく、学級の抱える問題と目標と繋がるより具体的な活動を判断・決定させる。
活動の振り返りの場面	自分たちの実情を振り返り、今後の活動を改善したり、活動を終えたあと自分たちの変化を価値付けさせたりする。

【生徒指導上の4つの視点を意識した支援】

自己存在感の感受	事前にアンケートを実施し、学級全員の考えや思いを知ったうえで学級会を行う。司会団とも共有することで、多数派の意見だけで、話し合いが進まないようにする。
共感的な人間関係の育成	アンケート内容を事前に司会団と共有し、少数派の意見も学級会中に取り上げられるようにする。必要なら教師が机間指導や、全体共有の場で、その意見を価値付ける。
自己決定の場の提供	学級会を終えた後や、行事を終えた後に、今後自分、学級がどう活動していくかや、学級会を通じて自分が感じたことを記述する場面を設定し、生徒の変容をみとめる。
安心・安全な風土の醸成	学級会中や、行事に向けての活動中に、「どうしていききたいか」や、「自分ならあと何ができそうか」など声をかけ、安心して活動に取り組めるようにする。

【資料3】手立て④についての説明

資料3にあるように、各適切な場面で学級会を設定し、生徒指導の実践上の4つの視点を取り入れた指導を行う。すると生徒は、考えを安心して述べて合意形成（安心・安全な風土の醸成）しながら仲間の意見を尊重（共感的な人間関係の育成）したり、自分の考えの良さを実感（自己存在感の感受）したりしながら、自分の活動のやりたいことを更新（自己決定）していく。そして、更新した自分の考えをもとに、学校行事で自分の成長を目指して動き出す。

（５）抽出生徒

生徒A	前期の学級代表である。思考力が高く、基本的に誰とでも分け隔てなく関わることができる。一方、2年生までのQ Uの結果では侵害行為認知群に該当しており、他者との間に距離を取ってしまう傾向が見られる。悩みを周囲に相談したり、助けを求めたりすることが苦手で、無理をして一人で抱え込んでしまう場面もある。また、自己評価が低く、特に大人の目を意識しやすい。 活動を通して互いの気持ちを知り、思いやる経験を積むことで、自分のよさに気付き、自信と自己有用感を高めていくことを期待している。
生徒B	友人関係のトラブルをきっかけに、1年生の3学期以降、断続的に欠席が続き、2年生では約60日程度の登校にとどまった。日常の様子から、人と関わる際に自分の思いを中心に考え、それを強く主張してしまう傾向が見られる。一方で、行事には前向きに取り組む姿が見られる。 行事に向けた活動や学級会を通して、相手の気持ちを考えながら関わる経験を積み、よりよい人間関係を築いていくことを期待している。

3 単元計画と研究の実践

（１）単元計画

	学級会を行った場面	学級会の議題
甲山祭Ⅰ 「そうだ 甲山 行こう」 への取り組み （4月中旬から5月中旬）	目標（ブース）の決定の場面 ※全員リーダー活動決定	みんなが楽しめる甲山祭Ⅰにするには、どんなブースにすればいいか考えよう
	学級の問題を共有する場面 ※学級リハーサルを終えた後	今の自分たちの活動を振り返り、改善点を探そう
	活動の振り返りの場面	甲山祭Ⅰの活動を振り返ろう
甲山祭Ⅱ 「合唱コンクール」 への取り組み （7月上旬から9月下旬）	目標（スローガン）の決定の場面 ※全員リーダー活動決定	みんなの思いのこもったスローガンを決めよう
	学級の問題を共有する場面 ※学年リハーサルを終えた後	これまでの自分たちの活動を振り返り、明日からの活動に生かそう
	学級の問題を共有する場面	スローガンに近づくために、残りの時間でできることを考えよう
	活動の振り返りの場面	甲山祭Ⅱを振り返り、甲山祭Ⅲの活動に生かそう
甲山祭Ⅲ 「スポーツの部」 への取り組み （9月下旬から11月上旬）	目標（スローガン）の決定の場面	自分たちの力で甲山祭Ⅲを創り上げるために、合言葉となるスローガンを考えよう
	学級の問題を共有する場面 ※全員リーダー活動決定	これまでの活動を振り返り、自分が全員リーダー活動で取り組むことを考えよう
	活動の振り返りの場面	甲山祭ⅠからⅢを通じて、成長できたことを振り返ろう

【資料5】単元計画

(2) 研究の実践

手立て⑦ 仲間への貢献活動（全員リーダー活動）の実施における教師支援の工夫について

手立て⑦について、生徒Aに対して教師の行った支援の工夫を、甲山祭ⅠからⅢの順に分析、考察をする。

○生徒Aについて

資料4にもあるように、生徒Aは前期学級代表として責任感が強く、学級のために行動しようとする姿が見られた。一方で、自分の頑張りを肯定的に捉えることが苦手であり、困り感を抱えていても一人で解決しようとする傾向があった。生徒A、Bは全員リーダー活動においては、資料6に示すような活動を行った。

○甲山祭Ⅰについて

甲山祭Ⅰでは、「みんなの意見を聞くリーダー」として学級会の司会を担当した。活動当初の生徒Aは、学級の意見を丁寧に聞き取りながら話し合いを進め、出された意見を整理してまとめようとしていた。しかし、甲山祭Ⅰへの活動が進むにつれて準備期間が限られていることへの不安が高まり、活動が停滞する場面では、効率よく結論を出そうとするあまり、自分の考えを強く主張する姿が見られるようになった。

そこで生徒Aに聞き取りを行った。(資料7) A2の「時間があまりないので、～」という発言から、生徒Aは学級の活動が円滑に進むことを願う一方で、時間的な制約への不安から効率を優先して話し合いを進めようとしていたことが分かった。そこで、T3のように生徒Aの考えを肯定的に受け止めた上で、T5のように、学級会では結論を出すことだけでなく、仲間の意見を聞きながら納得して活動を進めることも大切であることを伝えた。その結果、その後の学級会では、「ほかに意見はありませんか」と仲間に問いかけたり、「この意見にはこんな思いがあるんだね」と発言の背景を確認したりする姿が見られるようになった。また、自分の考えをすぐに示すのではなく、出された意見を整理して全体に問い返す場面も増えた。甲山祭Ⅰ終了後、生徒Aは活動を通じて資料8のように振り返った。このことから、生徒Aは話し合いの目的を「早く決めること」から「互いの意見を聞きながら納得して決めること」へと捉え直したことが分かる。また、自分の意見が採用されることだけでなく、合意形成に向かう過程そのものを大切にする姿勢が見られるようになった。さらに、仲間とともに意思決定を行うことの価値に気づき、自身のリーダーとしての役割を再認識したと考えられる。

○甲山祭Ⅱについて

甲山祭Ⅱでは、「アドバイスリーダー」として活動するとともに、合唱コンクールでは指揮者も務めた。様々なパートの練習に参加する中で、仲間の思いや状況を考えながら声を掛ける姿が見られた。また、甲山祭Ⅰで身に付けた「相手の意見や思いを受け止める姿勢」を生かし、一人一人に応じた助言や励ましを

	生徒A	生徒B
甲山祭Ⅰ	みんなの意見を聞く リーダー ※学級会（司会）	盛り上げリーダー ⇒来場者が楽しめる ように取り組む
甲山祭Ⅱ	アドバイスリーダー ※学級会（板書） 指揮者	録音リーダー ⇒パート練習のとき、音源を流す担当
甲山祭Ⅲ	練習計画リーダー	みんなを笑顔にする リーダー ※学級パフォーマン スリーダー

【資料6】生徒A、Bの全員リーダー活動

T1：最近の学級会を見ていると、少し急いで話し合いを進めようとしているように見えたけれど、何か理由はあるかな。
A2：時間があまりないので、このままだと準備が間に合わないんじゃないかと思ってました。
T3：その考えは学級のためを思っていることだから大切だね。でも、学級会の目的は早く決めることだけかな。
A4：みんなで決めることですか。
T5：そうだね。Aさんの役割は『みんなの意見を聞くリーダー』だよ。みんなの意見を聞いて、納得できる形でまとめていくことも大切だと思うよ。
A6：確かに、時間を意識しすぎてしまっていた部分があるかもしれません。

【資料7】生徒Aの聞き取り

今までだったら時間と手間を優先して多数決で決めてところを、みんなと話しながら決めることで、例えば自分の思ったものにならなくても、納得してこのあとの活動につなげることができると思った。

【資料8】生徒Aの振り返り

行うなど、学級全体を支える立場としての成長が見られた。本番前日の活動を終えた後、生徒Aの成長を価値付ける言葉かけを行った。甲山祭Ⅱ終了後に生徒Aは、資料9のように振り返った。生徒Aは合唱練習や指揮者としての活動を通して、仲間と支え合うことの価値に気付いたことが分かる。また、一人で課題を抱え込むのではなく、仲間の支えを受けながら活動することの大切さを実感したと考えられる。さらに、仲間とのつながりを肯定的に捉える姿から、共感的な人間関係が育まれ、自身の成長を支える存在として仲間を認識できるようになったことがうかがえる。

今までで一番強い思いをもって練習してきた合唱。だからこそ、うまくいかないときは悩みました。それでも、みんなの強い気持ちや支えがあったから最後まで走りぬけることができました。本当にありがとうございます。自分のそばに友達という宝物があることに気づきました。

【資料9】生徒Aの振り返り

○甲山祭Ⅲについて

甲山祭Ⅲでは、「練習計画リーダー」として活動した。生徒Aは、これまでのリーダー活動で得た経験を生かし、生徒会役員として学校全体のために貢献したいという思いをもち、意欲的に活動へ取り組んでいた。一方で、甲山祭Ⅲの運営を生徒会が担当していたため、自身が直接活動する機会は限られていた。そのような中、生徒Aは、自分が前面に立って活動することだけが貢献ではないと考え、学級や活動全体の様子を俯瞰的に捉えながら、必要に応じて練習計画を調整したり、仲間に助言したりすることを意識して活動していた。これは、甲山祭Ⅰで身に付けた「仲間の意見や思いを受け止める姿勢」や、甲山祭Ⅱで実感した「仲間と支え合うことの大切さ」を生かしながら、自分にできる形で学級や学校全体に貢献しようとする姿であったと考えられる。

甲山祭Ⅲ終了後、生徒Aは資料10のように振り返った。このことから、生徒Aは活動を通して、自分の思いだけでなく仲間一人一人の思いや葛藤にも目を向けられるようになったことが分かる。また、自ら企画したエンディングによって仲間の成長や達成感を支えることができた実感し、自分の活動が学校全体に貢献したという自己有用感を高めたと考えられる。さらに、甲山祭Ⅰでの合意形成の経験や甲山祭Ⅱでの仲間とのつながりを基盤として、仲間のために自分ができることを考えながら行動する姿へと成長したことがうかがえる。

(前略) 当日は、特にエンディングが印象に残っている。みんな感動して泣いているのを見て、みんな5組が大好きで、その分うまくいかなかったり、自分が取り残されているという焦りや、苦しみを感じて悩んだりすることもあったのだと思った。自分が考えたエンディングで多くの人が感動してくれて嬉しかった。(後略)

【資料10】生徒Aの振り返り

○手立て⑦の検証とまとめ

生徒Aは、甲山祭Ⅰでは仲間の意見を聞きながら合意形成を図ることの大切さに気付き、甲山祭Ⅱでは仲間を支えられながら活動することの価値を実感した。甲山祭Ⅲでは、自分が前面に立つだけでなく、全体の状況を見ながら仲間を支える姿が見られるようになった。また、自身の活動によって仲間や学校全体により影響を与えられたことを実感し、自己有用感を高めていった。このことから、全員リーダー活動を通して仲間への貢献を積み重ね、その頑張りを教師や仲間が価値付けることで、生徒Aは自他のよさに気付き自分なりの方法で周囲に貢献しようとする姿へと成長したと考えられる。

手立て①

適切な場面での学級を設定した上での、生徒指導の実践上の4つの視点を取り入れた指導について

手立て①について、学級、特に生徒Bに対して行った生徒指導の実践上の4つの視点を取り入れた指導について、甲山祭Ⅲに向けての活動を踏まえ、分析、考察していく。

○自己存在感の感受

学級会では、信頼関係が築かれていても、自分の考えを安心して表現できない生徒もいる。特に生徒Bは、これまでの経験から、自分の思いを率直に伝えることで人間関係が崩れることへの不安を抱いていた。そこで、事前アンケート(次頁資料11)を実施し、一人一人の考えを座席表に整理して司会団と共有し

た。その結果、生徒Bを含む全ての生徒が自分の思いや考えを表出しやすくなり、**自己存在感を感じられる場**となった。

○共感的な人間関係の育成

生徒Bは、資料11の内容から、パフォーマンスに向けて取り組むモチベーションに差があることを感じていることが分かる。資料12C5の「パフォーマンスリーダーの人たちが～」という発言から、パフォーマンスリーダー（生徒Bを含む）の努力や思いに目を向け、それを理解しようとする姿が見られた。また、課題を他者の問題として捉えるのではなく、「私たち自身でも」と自分たちの行動に結び付けて考えていることから、相手を尊重しながらよりよい活動を目指そうとする態度がうかがえる。このことは、互いの立場や思いを理解し、支え合おうとする**共感的な人間関係の育成**につながっていると考えられる。

○自己決定の場の提供

資料13の「みんなを笑顔に～」という記述から、生徒自身が活動を通して得た学びを整理し、今後どのように行動していくかを自ら考えていることが分かる。また、「最初は自分のことで精いっぱいだったけれど、～」という記述からは、自身の変容を振り返り、その成長を自覚している様子がうかがえる。このことから、振り返りの場が活動の成果や課題を見つめ直し、今後の在り方を自ら選択・決定する機会となっており、**自己決定の場を提供できた**と考えられる。

○安心・安全な風土の醸成

資料13の「少しずつお互いを支え合い、～」や、「みんなが笑顔で踊っている姿を見るたびに、～」という記述から、仲間と協力しながら活動する中で、互いを認め合い、支え合える関係が築かれていたことが分かる。また、「うまく教えられるかちょっと不安で、～」と、自身の不安を率直に表現できていることから、失敗や不安を受け止めてもらえる安心感の中で活動できていたことがうかがえる。

このことから、生徒が自分の思いや不安を安心して表現し、仲間と協力しながら活動できる環境が形成されており、**安心・安全な風土が醸成されていた**と考えられる。

○手だて①の検証とまとめ

生徒Bが安心して自分の考えを表現できるよう、事前アンケートを実施し、話し合いに反映させたことで、学級の一員として認められる**自己存在感の感受**につながった。また、学級会や行事に向けた活動を通して、仲間の努力や思いに目を向ける姿が見られ、**共感的な人間関係の育成**が図られた。活動後の振り返りでは、自身の変容や今後の行動について考えることができ、**自己決定の場の提供**となった。加えて、「支え合い、助け合える関係ができた」と振り返っていることから、仲間との関わりの中で安心感を得ながら活動に参加でき、**安心・安全な風土の醸成**につながったと考えられる。以上のことから、手だて①は、生徒Bが他者の気持ちを意識しながら関わる力を育み、よりよい人間関係の形成を促す上で有効であったと考える。

4 課題と考察

本研究では、生徒Aと生徒Bに対して、生徒指導の実践上の4つの視点を意識した支援を行った。その結果、両生徒ともに他者との関わりを通して自分や仲間のよさに気づき、考えを見つめ直す姿が見られた。また、学級会や学校行事での経験を通して、自らの考えを更新し、その考えを基に行動しようとする姿も見られたことから、「他者との関わりの中で自他のよさに気づき、次の一步を踏み出そうとする生徒」の育成に一定の成果があったと考える。一方で、その変容が日常生活の中でも継続して見られるかについては、今後も見取る必要がある。また、本研究の手立ては他の生徒にも有効であると考えられるが、生徒の実態に応じて支援を工夫することが求められる。今後も、生徒が他者との関わりの中で自他のよさに気づき、自ら次の一步を踏み出せるよう支援を続けていきたい。

応援	フィナーレ
また万が一の事態に備えておきながら、 持っているイメージが少しある。 この動きがしたいと思えるのかもしれない。 （応援ができるようになった）	授業以外の練習にも出てくれる子も増えてきた。 新しい課題で挑戦していきたくていいと思いました。 でも、やっぱりまだ覚えるのが早いのも同じ。 なれて、もっといろんな人を教えてほしい。 授業の時間と違って、自分たちで練習する。 してしまったり練習がずれて見えてくる。 （リズムダンスはあまり練習できていないので、 曲に集中して聞いている状況がある）
練習	リレー
上に乗る人が安心して走れるようにしっかり と土俵を作る。足や膝を傷めず走り回れる ように安心して走れるようになりました。	実際に走った事がないからどんなものになるかわかり ません。練習もまだ少ないので、練習する時間が遅いと感じる。

【資料11】 生徒Bの事前アンケート

司会1：これまでの活動を振り返り、何か意見がある人はいますか？

C2：フィナーレというか、全体的になんだらうけど、モチベーションに差があるように感じる。

司会3：どんなところにそれを感じますか？

C4：学年の練習のときに、リーダーが前で話をしているとき、気が抜けてしまっている気がする。

C5：パフォーマンスリーダーの人たちが頑張っていてやってくれているから、私たち自身でも質問したり、帰りの練習に参加したりするべきだと思う。

【資料12】 授業記録

（前略）それでも、みんなと一緒に練習を重ねるうちに、少しずつお互いを支え合い、助け合える関係ができていったように思います。

活動を通じて感じたことは、「一人じゃできないことも、みんなとならできる」ということです。最初は自分のことで精いっぱいだったけれど、みんなのことを考える時間がどんどん増えていきました。みんなが笑顔で踊っている姿を見るたびに、「このメンバーと出会えてよかった」と心から思いました。

大切なのは、完璧に踊ることではなく、みんなで作ってきた時間と気持ちだと思います。みんなを笑顔にできるように、自分にできることを精いっぱいやっていこうと思います。

【資料13】 生徒Bの振り返り